

# 存在要求の要求とそれへの応答

——ハイデガー技術論の理解のために——

君嶋 泰明（法政大学）

## *The demand for demanding for being*

— *A contribution to the understanding of Heidegger's theory of technology*

Yasuaki KIMIJIMA

In this paper, I argue that Heidegger's notion of the "essence of the modern technology" can be interpreted as a kind of demand which the so-called "beings as a whole" put on human beings and which I call the 'demand for demanding for being.'

This demand consists of two parts. One is the demand for demanding what comes into appearance to be localized in advance. The beings as a whole put this demand on me when I attempt to let individual beings appear. This is because, in order for individual beings to appear, they have to be localized appropriately in advance, and what makes individual beings "beings" are the beings as a whole. I argue that this demand makes the difference between magic and technology because the former ignores this demand whereas the latter does not.

The other part of the demand is the demand for determining the essence of what appears. This demand comes from the beings as a whole in such a way that they remain hidden and undetermined behind the appearance of individual beings and as such make the inexhaustible possibility of determining the essence of what appears from them. I exemplify, by referring Sadi Carnot's study of the essence of heat, that this demand can be construed as what prompts the transition from τέχνη to the modern technology.

**Keywords:** technology, τέχνη, φύσις, beings as a whole, essence of truth

**キーワード:** 技術、テクネー、ピュシス、全体としての存在者、真理の本質

## はじめに<sup>1</sup>

本論の目的について述べる前に、いくつか用語を導入しておきたい。

そこにあるはずのものがそこになくて途方に暮れる、という状況を考えてみよう。それはたとえば、財布を忘れたとか、道を間違えたとか、待ち人が来ないといった状況である。このようなとき、私は、たとえば財布を探して鞆をひっくり返したり、目印となる建物を探して歩き回ったり、待ち合わせ場所の周辺を見回したりするだろう。そのさい私は、財布等が存在しているはずのところに存在していない、という事態に直面しつつも、そのことをすぐには受け入れられずにいる。

さて、この状況においては、次の三つのことが観察できるように思われる。

一つ目。私が上の状況で、財布等が各々の場所に存在しているはずだと考えるとき、私はそれらのものが、各々の場所に、私が見いだすのに先立ってすでに存在していることを求めている。いいかえれば、私はここで、財布等が現れるべきところにあらかじめ**局在**していることを求めているのである。以下ではこの要求を現出物の**局在要求**と呼ぶことにしよう。

二つ目。私は上の状況で、鞆をひっくり返したり、付近を歩き回ったり、待ち合わせ場所の周りを見回したりすることによって、財布等をどのようにかして発見しようとする。そしてそのさい鞆の中を手探りしてみたり、道沿いに視線を這わせてみたり、待ち合わせ場所の周辺にいる人々を一人ずつ視認してみたりする。これらの行動は、財布等がこれらの行動にたいして直接現れてくることを求めているものだといえる。そこで、以下ではこのような行動に伴う要求を、存在者の**即時的現出要求**と呼ぶことにしよう。

三つ目。財布等は、それらが現れるべきところにすでに局在している場合にのみ、現れてくることができる。それゆえ、私は財布等にたいしてその現出を要求したいなら、まずもってそれらにたいしてその局在を要求し**なければならない**。つまり、私は現出物の局在を要求するよう暗黙理に要求されている、といえる。以下ではこのような高次の要求を、現出物の**局在要求の要求**と呼ぶことにしよう。

ところで、この局在要求の要求は、本論で包摂存在者と呼ぶものから来していると考えられる（後述するように、この包摂存在者とは、ハイデガーが「全体としての存在者 (Seiendes im Ganzen)」と呼ぶものにたいする本論の解釈である）。まず、存在しているものの一切を、個々の存在者の集まり（＝複数の存在者）としてではなく、一つの存在しているものとして捉えてみよう。すると、個々の存在者を互いに異なるものにしていくあらゆる特殊性は度外視され、一切が、空間すら、一つの「存在しているもの」というもっとも一般的なものへと埋没し、一体化してゆくだろう。それは「存在している」というもっとも一般的な規定しかもたないような存在者である。そのようにして、いわば思考によってのみ捉えら

---

<sup>1</sup> 大会での発表原稿に含まれていた混乱や誤りを可能な限り修正し、以下全文にわたり必要な加筆を行った。その結果、発表原稿にはかなり手を入れることとなった（修正箇所はいちいち明示しない）。

れうる、しかしたしかにそれこそが存在しているといいうような最広義の存在者を、ここでは便宜的に**包摂存在者**と呼ぶことにしよう。

包摂存在者は、個々の存在者が現れてくる以前に、私にたいしてどのようにかして与えられている、その意味で第一義的な存在者である。それ以外には何も存在していない。それゆえ個々の存在者は、すべて、この**包摂存在者の中から現れてくる**という仕方ではか私にたいして現出しえない。それゆえ存在者の即時的現出要求は、すべてこの包摂存在者に向けてなされることになる。

他方、個々の存在者が存在者であるのは、それらが包摂存在者の中から現れてくるさいに——アイデアを分有するように——包摂存在者から「存在している」という規定を継承するからである。また個々の存在者は存在者である限り、現れるべきところに局在することなしには現れてくることはできない。まとめると、存在者は局在することによってのみ現れることができ、存在者を存在者にしているのは包摂存在者である。とすると、私をして現出物の局在を要求するよう強いるのは、包摂存在者だということになる。かくして、件の局在要求の要求は、包摂存在者が私に課す要求だということになるのである。

なお、ここでは詳述できないが、この局在要求の要求には、現出物の**本質規定の要求**とも呼べるものが伴うことになる。本論では両要求をひとまとめにして現出物の**存在要求の要求**と呼ぶことにする。

さて、前置きが長くなったが、本論の目的は、ハイデガーが「現代技術の本質」と呼ぶものを、いま述べた包摂存在者が人間に課す現出物の存在要求の要求として解釈できることを示すことである。典拠として、主にハイデガーの1953年の講演「技術への問い」（GA7所収）、1935年夏学期講義『形而上学入門』（GA40）、1930年の講演「真理の本質について」（GA9所収）を用いる。

本論の解釈の意義についても簡単に触れておこう。

タバチニックはハイデガーの技術論を「受動的**本質主義** (passive essentialism)」（Tabachnick, 2007, 497）として特徴づけている。ハイデガーの見立てによれば、現代技術は、必要なものが必要とされるところへ即座に届けられるように、人間を含むあらゆるものにたいして各々の持ち場へとすみやかに出動可能な「在庫 (Bestand)」として存在することを強いる——そのように「**そそのかす** (herausfordern)」——いわゆる「**総かり立て体制** (Ge-stell)」という形態をとるようになった。受動的**本質主義**とは、こうした技術の動向にたいして、人間にはそれを制御することはできないとする立場である。むしろ「**受動的**本質主義**者によると、あらゆるものを取り込む技術から逃れたければ、何もしてはならない。さもなければ、彼らの行動は技術の原動力としていま一度吸い上げられ、あらためて相手方に回らされることになるだろう**」（ibid., 500）。とはいえ、希望がないわけではない。この立場によると、そうした不可逆的に充進する技術の支配を自覚することにより、「われわれは技術とのより**本来的で自由な関係**を取り戻すことができるかもしれない」（ibid., 499）とされるのである。

ここでいわれる「**技術とのより本来的で自由な関係**」とは何かについては議論の分かれるところだろうが、少なくとも技術の動向は人間の制御を超えているという点については、

解釈者の間で概ね意見は一致している。たとえばフェルベークは、「われわれの時代において、[存在者を] 現れさせるやり方が「そそのかす」という性格をもっているのは、ハイデガーによると、存在の歴史的運命の帰結である」とし、「それは人間の行いの結果ではない」と強調している（Verbeek, 2005, 55-6）。また森も、「その [= 総かり立て体制の] 出現は、存在とは何を意味するかをめぐる何千年にもわたる歴史的動向のなかでおのずと生じてきた、いわば存在の出来事なのである」とし、人間は「そのめぐり合わせを耐え忍び、持ちこたえる」よう仕向けられている、としている（森, 2020, 163）。

本論に意義があるとすれば、それは、この「存在の歴史的運命の帰結」や「存在の出来事」なる謎めいた言辞に、少しでも理解可能な内容を与えようとするところにあるといえるかもしれない。ハイデガーの技術論についての「受動的本質主義」的解釈は、技術の発展を導くのは人間ではなく存在である、ということを強調し、そのいわんとすることのさらなる理解を放棄することで、彼の技術論をいたづらに神秘化してしまうきらいがある<sup>2</sup>。以下ではこのような問題意識のもと、技術の動向を導くのは**包摂存在者が人間に課す現出物の存在要求の要求とそれにたいする人間の応答**である、という解釈を提示したい。

論述の手順は次の通りである。上述したように、存在者の即時的現出要求は、現出物が現れるべきところに局在していない限り、空転することとなる。第1節では、この空転する即時的現出要求が、（唐突に思われるかもしれないが）**呪術**（magic）と技術の共通の根と見なせると論じる。そのうえで第2節では、現出物の局在要求の要求は、必要に応じて自然物から人工物を「生み出す（hervorbringen）」ことを求める**人工物の産出要求**をも含意していると論じ、呪術と技術の違いはこの要求に応じるか否かに存していると主張する。そして、本論のいう包摂存在者がハイデガーのいう全体としての存在者に相当していることを示したうえで、現出物の局在要求の要求には、その本質規定の要求が伴っていると論じる。第3節では、両要求からなる存在要求の要求が、ハイデガー的にいって、技術の発展を主導する当のものだと考えられることを、サヂ・カルノーによる熱の本質についての考察に即して例示する。

---

<sup>2</sup> このような傾向にたいして森は、「この特異な運命論においていったい何が語られているのか」と問い、それは「「存在と真理」をめぐる歴史的ヴィジョン」であると自ら答えている（森, 2020, 164）。私もこれには同意する。しかし、このヴィジョンの見据えるものを「テクネー（技術）と合体したエピステーメー（科学）[...]」が、「[...] 同時に、フロネーシス（行為的直観）でもあろうとする」（ibid., 169）事態としたうえで、事業としての科学技術そのものを一個の行為者と捉えつつ、その「原動力」に「神に取って代わろうとする「力への意志」や「新時代を創出しようとする「革命」志向」を見ようとする一種の擬人化的な解釈が（ibid., 173）、はたして**存在による**技術の発展の主導ということの解釈として妥当なのか、私には判断がつかない。本論はむしろ、森のいう「存在と真理」の関係——あるいは本論の言葉でいえば「存在と現出」の関係——の歴史的変容の「原動力」を、包摂存在者（＝存在）が人間に課す存在要求の要求に見ようとするものである。

## 1. 呪術と技術の同根性

かつて H. H. プライスは、『思考と経験』(1953) で、人間の心には本論のいう存在者の即時的現出を求める傾向がもともと備わっていると主張した<sup>3</sup>。彼によると、人はしばしば「非経験的思考(non-empirical thinking)」と彼が呼ぶものへと導かれる。非経験的思考とは、経験的事実を度外視して、自分の望み通りに事が運ぶと信じようとする心の動きである。プライスはその例として、気圧・風向き・湿度からしてこれから雨が降るのは明らかなのに、そのことを信じようとしないことや、道路標識からして道を間違えているのは明らかなのに、このまま進めば目的地にたどり着けると自分に言い聞かせるといったことを挙げている。彼はそのうえで、次のように述べている。

[...] これらの事例が示唆しているのは、人間の心にとってこの世界はもしかすると必ずしも居心地のよいものではないのかもしれない、人間の心にもともと備わっているのは、いわば望むものがすべて、それを望んだという事実それ自体によって実現し、すべての命題が、それを考えたという事実のみによって真となるような世界ではないか、ということである。夢の中では、われわれはこれと幾分似た世界を生きることになる。[そこでは]思考と欲求は感覚によって制御されず、「現実感(sense of reality)」がもはや働かないか、ほとんど働かなくなる。もしかすると、人間の心にとっては、夢を見ることの方が、起きて生活することよりも性に合っているのかもしれない。(Price, 1962, 140)

ここでプライスは、人間の心は、「望むものがすべて、それを望んだという事実それ自体によって実現」することを求めるようにできているのであり、そのような人間の心にとって、この世界は必ずしも居心地のよいものではなく、むしろ夢を見ることの方が性に合っているのではないかと述べている。これは本論の言葉でいいかえれば、人間の心は存在者の即時的現出を求めるようにできている、ということになる。

プライスのこの主張は、基本的には正しいと考えられる。その一つの証拠は、いわゆる呪術の存在である。

上述したように、存在者の即時的現出要求は、現出物が現れるべきところに局在していない限り、空転を余儀なくされる。プライスの言葉でいいかえれば、それは望み通りにならない現実と「衝突」し、「この衝突によって、私の思考上の操作 [= 即時的現出要求] は、知覚できる世界の中で進展している過程とは別物であることが露呈する」(ibid., 141) ことになる。彼はこの経験を「原初的「否定」(primitive 'not')」(ibid.) の経験と呼んでいる。

一方、異なる文脈ではあるが、かつてマリノフスキーは、ここでいう「否定」の経験に着目し、そこに呪術の「水源(fountainhead)」(Malinowski, 1992, 82) を見ようとしていた。彼はまず、この「否定」の経験の後に人がしばしばとることになる行動を次のように描写している。

<sup>3</sup> このプライスの指摘は呪術について調べたさいに井筒に教えられた (Izutsu, 2011, 5)。

人は、自分の無力にたいして怒りを覚えるとき、または挫折からくる憎しみに駆られるとき、こぶしを握りしめ、想像の中で敵に向かってそれを突き出し、呪いの言葉をつぶやき、憎しみと怒りの言葉をぶちまける。自分のものにならないつれない美女に恋い焦がれる者は幻想の中で彼女を見つめ、彼女に語りかけ、自分に何か頼んでくれるように懇願し、自分が彼女に受け入れられたように感じ、夢の中で彼女を自分の胸にかき抱く。期待と不安に駆られた漁師や猟師は、自分の想像の中で網にかかった魚の群れや槍で仕留めた動物の姿を見る。その名を呼び、言葉で大量の獲物の様子を詳しく描き出し、さらには自分が望んでいることを身振りで真似して表そうとまでする。(Malinowski, 1992, 79-80)

仇敵に痛手を負わせたい、美女を振り向かせたい、魚や動物をたくさん捕りたい。——これらは実現しなかったか、実現がきわめて困難に思える、私の「切望する目的 (desired end)」である (ibid., 79)。この目的の実現が阻まれると、私の即時的現出要求は空転する。私は目的の実現を諦めることができない。その結果、この「否定」の経験は、私をしてなりふり構わぬ「代償行為 (substitutue activity)」(ibid.) へと走らせることになる。代償行為とは、上の引用にあるように、望む結果を言葉で言い表したり、それを心ゆくまで想像したり、身振りで模倣したりする行為であるが、ここで重要なことは、「こうした暴発を操っているのは、目的にたいするイメージ」(ibid., 80) だということである。この「目的にたいするイメージ」は、空転する即時的現出要求の作り出すものにほかならない。

マリノフスキーによると、このように「目的にたいするイメージ」へと向かう代償行為——イメージを言葉で言い表したり、想像したり、身振りで模倣したりする行為——こそが呪術の正体である。本人にも制御できない仕方ではとぼしめるこの代償行為は、「信じやすく教養のない心」にとっては、「非人格的な源」からやってくる「啓示」と感じられることがある。そしてその結果、この代償行為には、現実に変化をもたらす力があると信じられることがある。すると、たんなる個人的な代償行為だったものが、たとえば戦いに勝利したり、恋愛や狩猟を成功させたりするための「儀礼」として共同体の中で共有され、継承され、いわゆる呪術という営みになってゆくのだという (ibid., 81-3)。

さて、ここではもとより、呪術についてのこのような説明の当否を問題にすることはできない。しかし、ここでは仮にそれが真であるとしてみよう。すると代償行為としての呪術は、空転する即時的現出要求にその根がある、ということが出来る。

そして私の見るところ、技術もまた呪術と同じ根をもっている。

たとえば M. フリッシュの『ホモ・ファーベル』(1957) からの次の一節<sup>4</sup>は、技術と呪術の同根性を物語っているだろう (これは、主人公ワルターとその前妻ハンナの会話の記録である)。

ハンナとの議論——技術について。技術とは、(ハンナによれば) われわれがそれを体験しなくてもすむように、世界を整える策略 (Kniff) である。技術者が被造物を執拗に実用物化しようとするのは、技術者が被造物と道を共にすることに耐えられず、それをもて余すからである。技術と

<sup>4</sup> この一節は Nye (2007, 198) に教えられた。

は、抵抗物としての世界 (Welt als Widerstand) を体験しなくてもすむように、それを排除する策略、たとえば速度でもってそれを希薄化する策略なのである。(Frisch, 2008, 285)

被造物こと自然は、たとえば厳しい冬の寒さを私に強いてくる。私はこの寒さを日々の暮らしから放逐したい。しかしそのためには、たとえば家の中に暖炉のようなものを作り、定期的に森へ行っては木を切り、薪を作り、それを運び、暖炉にくべ、火を起こし、その後も火を絶やさないう薪を補充する、といったことを行わねばならない。火を起こすまでの間、暖かさにたいする私の即時的現出要求は延々と空転させられ続ける。私は暖かさを局在化させるまでの間、即時的現出要求に頑として応じない「抵抗物としての世界」を「体験」し続けなければならないのである。

これにたいして、たとえば暖房設備は、ひとたび適切に設置されれば、スイッチ一つで室内に継続的に暖かさを提供してくれる。暖房設備があれば、私は「抵抗物としての世界」をショートカットし、即時的現出に近い「速度」で暖かさを現れさせることができる。技術はこのように、「抵抗物としての世界を体験しなくてもすむように、それを排除する」のである。

## 2. 存在要求の要求

このように、呪術と技術は、空転する即時的現出要求という共通の根をもっているといえる。しかしその一方で、両者がきわめて異なるものであることもまたたしかである。というのも、呪術が即時的現出要求それ自体によって (あるいはその一環としての代償行為によって) 現出物を局在化させようとするのにたいして、技術はそうではないからである。以下、まずは 1935 年夏学期講義『形而上学入門』(以下『入門』講義) に即していま述べた点を明確にしたい。

### 2. 1. 局在要求の要求の含意

『入門』講義によると、本論のいう現出物の局在化の過程には、大きく分けて二つのものがある。

一つ目は、上に見た暖炉から暖かさを現れさせようとする場合のように、現出物の局在化の過程全体が私自身の「知 (Wissen)」(GA40, 19) によって導かれている場合である。何をどうすれば暖炉から暖かさを現れさせることができるのか、という「知」なしには、そしてその「知」に従って私が実際に仕事をしない限り、この過程はけっして進展しない。ハイデガーは、このような過程を「テクネー」と呼んでいる。「テクネーとは知りつつ生み出すこととしての生産、建設である (Die τέχνη ist Erzeugen, Erbauen, als wissendes Hervorbringen)」(ibid.)。

二つ目は、そういった「知りつつ生み出すこと」を必要とせず、いわば自ずから局在化するものがたどる過程である。たとえば樹木は、私のあずかり知らない過程を通じて、す

でにしかるべきところに局在化している。人知れず進展するこのような過程を、ハイデガーはテクネーとは区別して「狭義のピュシス (φύσις im engeren Sinne)」と呼んでいる (GA40, 19)。

なお以下では簡便のために、テクネーを通じて局在化するもののことを**人工物**、狭義のピュシスを通じてそうなるものを**自然物**と呼ぶことにする。

さて、以上を踏まえて、現出物の局在要求の要求についてあらためて考えてみよう。包摂存在者は、現出物の局在を自分のところに要求してくるよう私に要求しつつ、自然物しか提供してくれない。それゆえ、私はこの要求を満たすためには、場合によっては自分で自然物から人工物を生み出さねばならない。いいかえれば、現出物の局在要求の要求は、必要に応じた**人工物の産出要求**を含意しているといえる。

とすると、呪術と技術の一つの違いは、この人工物の産出要求に応じるか否かに存するといえるだろう。というのも、上述したように、呪術は、**即時的現出要求それ自体によって**現出物を局在化させようとし、したがって産出要求には応じず、テクネーを導くような「知」ももたないからである。

## 2. 2. 全体としての存在者

次に、次節での議論に備えて、現出物の局在要求の要求にはその本質規定の要求が伴うということを押さえておきたい。しかしそのためには、まずは本論のいう包摂存在者がハイデガーのいう全体としての存在者に相当することを示さねばならない。

ハイデガーは『入門』講義において、上述した自然物を局在化させる狭義のピュシスとは似て非なる、広義のピュシス（「根源的により広く捉えられたピュシス (ursprünglich weiter begriffen[e] φύσις)」）についても語っている (GA40, 19)。ハイデガーが全体としての存在者と呼ぶのは、この広義のピュシスにほかならない。いわく、「全体としての存在者そのものが [広義の] ピュシスである (Das Seiende als solches im Ganzen ist φύσις)」 (ibid.)。

この広義のピュシス、全体としての存在者は、いわばそのうちで自然物や人工物が局在化するのを可能にするものとして、それ自身は局在化したりしなかったりするようなものではない。それは端的に存在している、というほかないものなのである。

ただし、「ピュシス」と呼ばれていることから窺えるように、それは狭義のピュシスからのアナロジーによって理解しうる面をたしかにもっている。たとえばバラの開花する過程は、自ずから、人知れず進展する。一方、全体としての存在者が存在するようになる「過程」も、もしもそのようなものがあるとすれば、この「バラの花が咲くこと (Aufgehen einer Rose)」 (ibid., 16) と何ほどこ似たものであるはずだろう。というのも、「全体としての存在者が存在している」という事態は、「バラの花が咲いている」という事態と同様、いわば「[自ずから、人知れず] 出来しては [そのまま消え去ることなく] とどまり続け、幅を利かせていること (aufgehend-verweilendes Walten)」、とでもいえる事態だからである (ibid.)。しかし、バラのつぼみのほころぶ過程が観察可能であるのにたいして、存在者が存在するようになる「過程」——つまり、「無」ではなく「存在」が成り立つようになった「過程」——はどこにも見いだすことはできない。そもそも、個々の人工物や自然物が、ではなく、**存**



**存在者が存在するようになっているのは、**どういうわけなのかわからない。そのような「過程」が仮にあるとしても、その内実は「存在」という事態そのものの中に畳み込まれ、秘匿されている、というほかない。そういう「存在」そのものもつゆえんのわからなさ、人知を容れない秘匿性が、広義のピュシス、全体としての存在者ということでハイデガーのいわんとすることには込められている。あるいは、ピュシス自身が「存在」とは何のこともかをそれ自身のうちに秘匿しつつ全面的に体现しており、その意味ではそれは「存在そのもの」である、とすらいえる。いわく、

このように出来し、それ自身へと自ずから出で立つことは（Dieses Aufgehen und In-sich-aus-sich-Hinausstehen）、存在者において観察可能なさまざまな過程（Vorgang）の一つと見なしてはならない。ピュシスとは存在そのものであり、それのおかげで存在者ははじめて観察可能（beobachtbar）となり、また観察可能であり続けるのである。（GA40, 17）

以上のような『入門』講義の記述に従う限り、ハイデガーのいう全体としての存在者は、本論のいう包摂存在者に相当するといつてよいように思われる。つまりそれは、「存在している」というもっとも一般的な規定しかもたないような（「存在そのもの」であるような）、思考によってのみ捉えられうる（それゆえ観察可能ではない）最広義の存在者、包摂存在者なのである。

### 2. 3. 本質規定の要求

次にこのことを踏まえて、今度は 1930 年の講演「真理の本質について」（以下「真理」講演）を参照しながら、包摂存在者こと全体としての存在者からの現出物の局在化要求の要求に、その本質規定の要求が伴っていることを示しておきたい。

それにあたり、まず押さえておくべきは、私にとって全体としての存在者は、通常、個々の存在者がそこから現れてくる**ところ**、一種の**場**と化しているということである。ハイデガーは「真理」講演で、この場のことを「開けた場（Offenes）」と呼び、そこから現れてきうるもの——テクネーか狭義のピュシスを通じて局在化しているもの、すなわち自然物や人工物——を総じて「現出可能物（Offenbares）」と呼んでいる（GA9, 185）。そして、この現出可能物を現れさせることを「存在させる働き（Seinlassen）」と呼び、それは同時に全体としての存在者を「包み隠す働き（Verbergen）」でもあるのだ、と述べている（ibid.）。いわく、

個々の行動には、[個々の存在者を] 存在させる働きが含まれていて、この働きが当該行動にかかわる存在者を存在させ、そのことによってその存在者を現れさせるのだが、この働きはまさにそうすることによって、全体としての存在者を包み隠すのである。[個々の存在者を] 存在させる働きは、それ自身において、同時に [全体としての存在者を] 包み隠す働きでもあるのである（Das Seinlassen ist in sich zugleich ein Verbergen）。（ibid., 193）

これに従うなら、私は個々の存在者を現れさせるのと引き換えに、全体としての存在者を包み隠しているということになるだろう。

しかし事はそう単純ではない。ハイデガーはここでいう個々の存在者を存在させることを「自由 (Freiheit)」(GA9., 188) と呼び (そう呼ぶ意図については本論では深入りできない)、この意味での「自由」を、「全体としての存在者をそうした一つの全体として現れさせることへと入り込まされていること (Eingelassenheit in die Entbergung des Seienden im Ganzen als einem solchen)」(ibid., 192) と同一視してもいる。これに従うなら、私はやはり全体としての存在者を現れさせようとしている (=そのことに「入り込まされている」) ことになる。

かくして以上を考え合わせるならば、私は**全体としての存在者を現れさせようとしてつつ、それを包み隠している**、といわねばならないことになる。

これは一見矛盾しているようだがそうではない。まずハイデガーによると、私は、まずはやはり、全体としての存在者を現れさせることへと「入り込まされている」。ただ、そのことを完遂していないだけである。というのも、「人間は、たしかにその行動の中で絶えず存在者とかかわりをもつが、しかし普通はつねに、存在者と、存在者のそのつどの現出可能性で満足している (er läßt es auch zumeist immer bei diesem oder jenem Seienden und seiner jeweiligen Offenbarkeit bewenden)」(ibid., 195) のだからである。いいかえれば、私はつねに全体としての存在者を現れさせるよう差し向けられてはいるのだが、実際には全体としての存在者を「開けた場」とし、この場を個々の存在者を現れさせることへと「明け渡す (freigeben)」(ibid., 185) ことで事足りりとしているのである。その結果、全体としての存在者は、個々の存在者が現れてくると交替するようにその背後へと退き、そのものとしては包み隠され、「無規定的なもの、規定不可能なもの」(ibid., 193) にとどまることになる。——かくして、私は全体としての存在者を現れさせようとしてつつ、それを包み隠しているという事態が成立することになる。

さて、本論にとって重要なのはこのことの含意である。全体としての存在者は、現出物の局在を要求してこいといいながら、それ自身はどこまでも無規定的なもの、規定不可能なものにとどまる。それはそのようなものとして、いわば開けた場の内奥から、私にたいして自分の求める現出物が何であるかを規定せよと絶えず要求してくる。全体としての存在者からの現出物の局在要求の要求には、このような仕方での本質規定の要求が伴うのである。それゆえ、私がたとえば「暖かさ」のような**一般的なもの**の現出を開けた場にたいして求めるとき、私はこの本質規定の要求への一つの応答として、自分の求めるものが何であるかを漠然とではあれ規定しているのである。

以上に見てきた現出物の局在要求の要求とその本質規定の要求を、ひとまとめにして**存在要求の要求**と呼ぶことにしよう。次節では、ハイデガーのいう現代技術の本質が、まさにこの存在要求の要求として解釈できることを示したい。

### 3. 現代技術の本質

ハイデガーは1953年の講演「技術への問い」において、先に見たテクネーとしての技術を「ポイエーシスという意味での生み出すこと（Her-vor-bringen im Sinne der ποιησις）」と呼び、「現代技術（moderne Technik）」をこれとは質的に異なるものだとしている。彼は、「現代技術もまた一つの現れさせることである」としたうえで、次のように述べている。

現代技術の動向を至るところで左右している現れさせることは、いまやポイエーシスという意味での生み出すことへとつながっていくことはない。現代技術において幅を利かせている現れさせることは、一種のそそのかすこと（ein Herausfordern）であり、それは自然にたいして、**そのものとして**発掘可能で、貯蔵可能であるような、エネルギーを提供するよう要求するのである。（GA7, 15）

ここでハイデガーは、現れさせること（＝即時的現出要求）を生み出すこと（＝局在化）から区別し、前者に後者を従属させたうえで、現代技術においては現れさせることが「一種のそそのかすこと」というかたちをとるようになったせいで、生み出すことが「ポイエーシスという意味での」それとは異なるものになってしまった、と述べている。テクネーと現代技術の間にはこのような質的相違があるというわけだが、それでは、それはより詳しくいってどのような相違なのだろうか。

まずは上の引用に続く記述を見てみよう。

しかし、このことは昔ながらの風車についてもいえるのではないか。いや、そうではない。風車の翼はたしかに風で回り、風の吹くのに直接身を任せている。しかし風車は、気流のエネルギーを貯蔵するために開発したりはしないのである。（ibid.）

いま、風車に回転軸と歯車と石臼がつながれていて、風車の翼が回ると石臼が回転して、結果的に小麦がひかれ、小麦粉ができるでしょう。この装置は、小麦粉を局在化させようとするテクネーの産物であるということが出来る。しかし、肝心の風車が「風の吹くのに直接身を任せている」以上、この装置は、風が風車の翼を回す方向と強さで吹いているときにしか仕事をしない。その限り、この装置は、利用者の即時的現出要求に応えるというよりは、それを空転させることの方が多いただろう。以下ではこのように、風や川や動物等の自然物に仕事をさせることにより何か別のものを生み出すことを、便宜的に**便乗的産出**と呼ぶことにしよう。

この便乗的産出は、かつてガリレイが技術の役割として語っていたものである。彼はその初期の著作『レ・メカニケ』（1599執筆）の中で次のように述べている。

[水を汲んだ] 手桶を引き上げて、それを適当な時にひっくり返して空にし、再びもとに戻して水を満たす、ということを動物は自分で考えて行うことができない。動物はただ力に十分恵まれ

ているだけなのである。それゆえ、職工たるものは、それらの動力源に本来的に欠けているものを、道具によって補ってやる必要があるのである。その道具には、それを用いることによってわれわれが欲する結果を達成できるようにするために、それら動力源がただたんに力を発揮するだけですむように、工夫や発明が施されていなければならない。そして、まさしくこの点にこそ機械の最大の有用性が存在する。（ガリレイ, 1973, 218）

ここでガリレイは、動物や風や川等の「動力源がただたんに力を発揮するだけですむように、工夫や発明」を施すことが、技術の役割であると述べている。このように、動力源が「力を発揮する」のに便乗して、何か別のものを生み出そうとすることが、ここで便乗的産出と呼ぶものである。これはあくまで「便乗」なので、ここで利用される動力源は、いつでもどこでも仕事をしてくれるわけではないという点に注意が必要である。

これにたいして、仕事をする能力、つまり各種のエネルギーそのものを発掘・貯蔵し、それにいつでもどこでも仕事をさせることができるとしたら、その技術はもはや便乗的産出とは呼べない。そしてそれこそが、先の引用から読み取れる、ハイデガーが現代技術と呼ぶものの新機軸である。以下ではこの新機軸を——便乗的産出とは対照的に、いつでもどこでも必要なものを生み出すことができるという意味で——**汎用的産出**とも呼んでおこう。

したがって、ハイデガーのいうテクネーと現代技術の違いは、便乗的産出と汎用的産出の違いに帰着するといえそうである<sup>5</sup>。だとするとここでの問題は、何が前者から後者への移行をもたらしたのか、という一点に絞られることになる。

ここでは上の移行にとって重要だったと思われる一つの考察を例にとって考えたい。それは、熱力学の父と呼ばれるサヂ・カルノーが 1824 年の著作『火の動力、および、この動力を発生させるに適した機関についての考察』で行った、**熱の本性**をめぐる考察である。

まずカルノーは、この著作の冒頭で、当時広まりつつあった、シリンダー内の蒸気を熱で膨張させてピストンを動かして仕事をする蒸気機関（あるいは火力機関）について、次のように述べている。

この機関は、はかりしれない重要性をもち、日に日に普及しているだけに、その研究はまことに興味ある課題である。[...] 火力機関はすでに、鉱山を採掘し、船を動かし、港や河をさらえ、鉄をきたえ、木を削り、穀物をひき、糸をつむぎ布を織り、きわめて重い積荷を運搬する等々のことをしている。火力機関はおそらくそのうちに、普遍的な原動機となり、畜力や水の落下や風力よりも好まれるようになるであろう。それは畜力にくらべて経済的だという長所をもつ。また水の落下や風力にくらべると、いつでもどこでも使用でき、けっして働きを中断しないという長所がある。（カルノー, 2020, 38）

---

<sup>5</sup> ハイデガー技術論にたいする代表的な批判の一つに、こうしたテクネーと現代技術の区別には十分な根拠がなく、両者の間には程度の差しかないというものがあるが、私はこの区別は実質的なものであると考える。この批判については、加藤（2003, 24-9）、Verbeek（2005, 67-76）を参照。

しかしカルノーによると、当時「火力機関の理論はほんのわずかしが展開されておらず、機関を改良する試みは […] ほとんど行きあたりばったりに行われて」いた（カルノー、2020, 41）。そこで彼が問題にするのは、熱の行いうる仕事には、熱という「事物の本性からくる限界」があるのかということと、熱に効率的に仕事をさせるのに適した「作業物質」はあるのかということである（ibid.）。ここでいう「作業物質」として従来採用されてきたのは水蒸気であるが、たとえば空気の方が適しているならそれを用いた方がよいというわけである。

さて、カルノーはこの問題に取り組み、最終的に、熱の仕事の効率は作業物質によらずに決まるという結論に達し、熱力学第二法則の基礎を築くことになった。しかし、ここではその議論の詳細には立ち入らず、むしろ次の点に注目したい。つまりカルノーは、火力機関を「普遍的な原動機」にするために、すなわち**あらゆるところに熱を局在化させ、それに仕事をさせるために、当の熱そのものの「本性」について考察しなければならなかった**ということである。熱とはどのようなものかが不明であるうちは、それに仕事をさせるための作業物質も定まらず、結果として熱の生み出す仕事は、たまたま利用されているにすぎない作業物質に依存した、**便乗的なもの**（「行きあたりばったり」なもの）にとどまっていただろう。それゆえ、熱の生み出す仕事を作業物質によらない**汎用的なもの**へと引き上げるためには、熱の本質をあらためて規定する必要があるだったのである。

そのうえで、ここではさらに次のように主張したい。

このように熱を汎用的に局在化させようとする者にたいして、まずもって当の熱の本質を規定する必要がある、ということを告げるのは、開けた場の内奥で現出物の規定可能性そのものとして存在している、全体としての存在者そのものである。

そればかりではない。もしもそうだとすると、**全体としての存在者の課すこの存在要求の要求、とりわけその本質規定の要求こそが、テクネーから現代技術への移行を促した当のものである**といえる。なぜなら、今日、各種エネルギーの多くは、発電所などでほかでもない**熱**に仕事をさせるために用いられている以上、熱の汎用性（作業物質への非依存性）が確立されていなければ、いくらエネルギーを発掘・貯蔵したところで、その用途は限定的なものにとどまっていたかもしれないからである。裏を返せば、熱の汎用性が確立されたことが、化石燃料、水力、原子力等、どんなものからもエネルギーを——それらが「ただたんに力を発揮するだけですむ」以上に——「そそのかす」という仕方で現れさせ、貯蔵しておくという体制、すなわち総かり立て体制を作り上げたといっても、過言ではないかもしれないのである。

以上が本論のひとまずの結論である。以上の議論は十分な論証とはなっていないかもしれない。しかしいずれにせよ、ハイデガーが現代技術の本質を総かり立て体制と呼び、それは「人間を集め、その人間をして、現れてくるものを持ち場に立たせるべく引立てさせる、かのそそのかす要求（Anspruch）」のことだといひ（GA7, 20）、さらに次のように述

べている限り、その真意をとくと考えるならば、上のような結論が導かれるように思われるのである。<sup>6</sup>

現れさせることが人間の作ったものではないとすれば、それはどこで、またいかにして生じるのだろうか。われわれは遠くまで探しに行く必要はない。必要なのは、人間をつねにすでに要求（Anspruch）してしまっているかのものを、先入観なしに聞き取ることだけである。（GA7, 19）<sup>7</sup>

## 文献

外国語文献からの引用にあたっては、邦訳がある文献は邦訳を参考にした。ハイデガーとフリッシュの文献からの引用は概ね拙訳により、それ以外の著作からの引用は概ね邦訳によった。

ハイデガー全集からの引用は、全集の略号 GA、巻数、頁数を記す。

*Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, 1975ff.

その他の文献は次の通り。

Frisch, M. (2008) *Homo faber: Ein Bericht*, Suhrkamp (1963, 中野孝次訳、『アテネに死す』, 白水社)  
ガリレイ, G. (1973) 「レ・メカニケ」, 豊田利幸編訳, 『世界の名著 21 ガリレオ』(211-70 頁), 中央公論社

カルノー, S. 著、広重徹訳 (2020) 『カルノー・熱機関の研究』, 新装版, みすず書房

Izutsu, T. (2011) *The Collected Works of Toshibiko Izutsu Vol. 1. Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech*, Keio University Press (2018, 安藤礼二監訳・小野純一訳, 『井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 言語と呪術』, 慶應義塾大学出版会)

加藤尚武 (2003) 「技術は、人間を引っ立て、現実のものを取り立てて発掘するように仕向ける」, 加藤尚武編『ハイデガーの技術論』(11-29 頁), 理想社

Malinowski, B. (1989) 'The Problem of Meaning in Primitive Language,' in C. K. Ogden & I.A. Richards (Eds), *The Meaning of Meaning* (pp. 296-336), A Harvest/HBJ Book (2008, 石橋幸太郎訳, 『新装 意味の意味』, 新泉社)

—— (1992) *Magic, Science and Religion and Other Essays*, Waveland Press, Inc (1997, 宮武公夫・高橋巖根訳, 『呪術・科学・宗教・神話』, 人文書院)

森一郎 (2020) 『核時代のテクノロジー論』, 現代書館

Nye, D. E. (2007) *Technology Matters: Questions to Live With*, The MIT Press

Price, H. H. (1962) *Thinking and Experience*, Harvard University Press

Tabechinick, D. E. (2007) 'Heidegger's Essentialist Responses to the Challenge of Technology,' *Canadian Journal of Political Science*, 40, no. 2 (pp. 487-505)

Verbeek, P. P. (2005) *What Things Do*, The Pennsylvania State University Press

<sup>6</sup> ハイデガー技術論は本来、本論で扱った技術本質論と、「物」をめぐる考察という二本の柱をもつ。両者を包括的に扱いつつ、本論では立ち入ることのできなかつた技術と人間のあるべき関係にまで踏み込んで論じている森 (2020) は、ハイデガー技術論の全体像を得るには好適である。

<sup>7</sup> 本論文は JSPS 科研費 JP20K12791 の助成を受けたものである。